

令和元年5月30日現在

機関番号：25501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16665

研究課題名（和文）近代モンゴルにおける翻訳事業に関する研究：国家建設期の国史編纂を中心に

研究課題名（英文）A Study on Translation Project in Modern Mongolia: Compiling National History in the Period of State-Building

研究代表者

橘 誠 (TACHIBANA, MAKOTO)

下関市立大学・経済学部・准教授

研究者番号：30647938

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、20世紀初頭の国家形成期モンゴルにおける翻訳事業、中でも国史編纂において翻訳がいかなる役割を果たしたのかを考察した。20世紀以前のモンゴルでは、いわゆる年代記という、チンギス・ハーン一族の歴史がチベット仏教との繋がりで記されてきたが、独立宣言以降は漢語や満洲語文献の翻訳を利用することにより、より実証的に国家の独立を正当化する歴史が求められた。そのため、本来は蔑称であった「胡」など特定の集団を指さない概念を「モンゴル」と読み替えることにより、同じく「胡」と呼ばれた匈奴や突厥を自国史に取り込み、より古く、より広範囲の歴史を執筆することを可能にしたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アジア諸国、特に日本は近代化に際し数多くの欧文書籍の翻訳を行い、効率的にヨーロッパ近代文明を吸収することに成功したとされる。中国では、独自の翻訳も行われたが、語彙に関しては日本語化した漢字語彙がそのまま利用された。20世紀初頭に帝政ロシア、ソ連の影響下に独立運動が進展したモンゴルにおいても、翻訳によって思想や制度が導入されていった。本研究では、モンゴルにおける翻訳事業の中でも、特に歴史編纂における翻訳の役割に注目し、近代化における翻訳の重要性について、他のアジア諸国との比較対象となる事例を提供することを心掛けた。

研究成果の概要（英文）：This study examines translation project in the early twentieth century Mongolia, especially focusing on the role of translations in compiling national history. So-called Mongolian chronicles, the history of Chinggis Khan's royal family, had been written before twentieth century. However, after the declaration of independence of 1911, more fact-based history was needed for Mongolia to justify national independence by using translations of Chinese and Manchu books. In this history, Chinese term "Hu", which was originally disparaging term and did not mean a particular ethnicity, was replaced as "Mongol". It enabled to include Xiongnu or Turks, which were called "Hu" in Chinese as well, in Mongolian history, thereby the range of Mongolian history became older and wider.

研究分野：アジア近代史

キーワード：モンゴル 翻訳事業 ナショナル・ヒストリー 国史編纂 ソ連史学 モンゴル年代記

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現在、モンゴル系とされる民族は中央ユーラシアに広く分布し、主にモンゴル国、中国の内モンゴル自治区、ロシア連邦のブリヤート共和国、カルムイク共和国などに居住している。その中でも「モンゴル史」と言い得る歴史を記述しているのは、主にモンゴル国と中国である。

モンゴル国における「モンゴル史」は、言うまでもなくモンゴル国の「国史(ナショナル・ヒストリー)」であり、中国における「モンゴル史」は中国内に居住するモンゴル族の「蒙古族史」である。双方ともに19世紀までの歴史、すなわち清代のモンゴルに関しては互いに言及し合っているが、20世紀の歴史になると、モンゴル国の歴史は現在のモンゴル国領内の事象を、中国の蒙古族史は現在の内モンゴル自治区領内の事象を中心とした記述に限定されていく。このように現在の国境を前提として歴史が語られる際に、その狭間に埋没してしまう歴史事象が存在することは夙に指摘されている。そして、このようなナショナル・ヒストリーを克服する必要性が唱えられ、グローバル・ヒストリーやトランスナショナル・ヒストリーといった新たな視座が提起され、これまでとは異なった歴史像の構築が目指されている。

申請者は、これまでの研究において、20世紀初頭の「モンゴル史」の中で等閑視されてきたモンゴル国と内モンゴルの関係を描き出すことを試みてきた。このような研究は、同じモンゴル族とはいえ国外の国民を扱うことからモンゴル国では敬遠され、中国においても独立国家モンゴルの歴史を「蒙古族史」において積極的に扱えないことから忌避されてきたテーマであった。モンゴル国が内モンゴルの統合を試みていたことはよく知られていたが、これまでの研究によって1910年代にモンゴル国と内モンゴルで盛んな交流があったことが具体的事例をもって考察され、内モンゴル内でもその対応は多様であったこと、またモンゴル国の対内モンゴル政策も一貫したものではなかったことが明らかになった。すなわち、当時の「モンゴル史」を現在の国境により分断することには大きな問題があることが改めて確認されることになったのである。

このような研究過程において、そもそもこのようなモンゴル(人民共和)国のナショナル・ヒストリーはいかにして成立し、モンゴル語史料がない時代をどのように記述し、いつから国外のモンゴル族を記述の対象から外すようになったのかに疑問を抱くようになり、その経緯を明らかにする必要があると考えた。

2. 研究の目的

アジア諸国、特に日本は近代化に際し数多くの欧文書籍の翻訳を行い、効率的にヨーロッパ近代文明を吸収することに成功したとされる。中国では、独自の翻訳も行われたが、語彙に関しては日本語化した漢字語彙がそのまま利用された。20世紀初頭に帝政ロシア、ソ連の影響下に独立運動が進展したモンゴルにおいても、翻訳によって思想や制度が導入されていった。本研究では、その中でも特に歴史編纂における翻訳事業に着目し、国家形成期のモンゴルにおいてナショナル・ヒストリーの形成に翻訳がいかなる役割を果たしたのかを解明することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、まず(1)モンゴル国において執筆された歴史書の収集に専念した。モンゴル国では、1934年に刊行されたアマルの『モンゴル国略史』、デンデブの『モンゴル国略史』、そしてチョイバルサンらの『発端と成就』の3冊がモンゴル(人民共和)国における最初のナショナル・ヒストリーとして位置づけられている。しかしながら、本研究ではそれ以前の歴史書に注目し、1928年に刊行されたバトオチルによる『モンゴル国の古来伝承を略記した書』の入手に努めた。本書は、これまでほとんど研究者の注目を集めてこなかったが、著者のバトオチルはアマルよりも前に匈奴をモンゴル史の中に位置づけており、バトオチルがいかにして匈奴史を執筆したのかも重要な研究テーマとなってくる。本書は本研究を進める上で極めて重要であるとの認識から、解題・注・索引・マニユスクリプトの一部を付してモンゴル国で再版した。

次に(2)バトオチルの著書を丹念に読み込み、匈奴がいかにしてモンゴル史に含まれるようになったのか、その経緯を考察した。その際に、どのような思惑によりモンゴル史が執筆されていったのかを、その執筆方針について政府内の議論なども含めて考察するように努めた。当時のモンゴル国ではナショナル・ヒストリー編纂に際して翻訳が重視されており、漢語、満洲語の文献の翻訳が進められていた。

最後に(3)執筆内容の変遷を考察した。1910年代から始まったナショナル・ヒストリー編纂の試みは、1920年代に一つの形が示され、1934年に3冊の歴史書として完成した。ところが、社会主義化が進行していくと、ナショナル・ヒストリーの位置づけ、執筆内容などに変化が現れるようになる。その変遷にどのような要素が影響したのかを考察する必要がある。

以上、20世紀初頭の国家形成期におけるモンゴル国のナショナル・ヒストリー変遷の過程について、翻訳事業を中心に考察することにより、アジアの近代化における翻訳事業の役割がより明確になると考えている。

4. 研究成果

研究期間中、モンゴル国立中央公文書館、モンゴル国立中央図書館などにおいて史料調査を実施した。特に、公文書館においては歴史の執筆を担っていた典籍委員会の議事録などを中心に閲覧した。また、図書館においては、典籍委員会メンバーにより執筆されたマニスクリプトを中心に閲覧した。収集した史料、文献を分析した結果、以下のような成果を得た。

まず、モンゴル国において再版した『モンゴル国の古来伝承を略記した書』の分析より、著者バトオチルは漢語史書の満洲語訳をモンゴル語訳して利用していたことが分かった。具体的には、満洲語訳『通鑑』、『通鑑綱目』などである。バトオチルは1920年代初頭からこれらの満洲語文献の翻訳に従事していたため、それらを利用して『モンゴル国の古来伝承を略記した書』を執筆したのである。バトオチルの著書の特徴は、漢語史書に「胡」などと記されていた集団全てを「モンゴル」と読み替え、モンゴル史の中に含めたことである。「胡」は匈奴や鮮卑、突厥などの周辺民族を示す蔑称であったが、モンゴルも同じく「胡」と呼ばれていたため、匈奴＝胡、モンゴル＝胡、匈奴＝モンゴルと説明された。また、「胡人」と記される安祿山などもモンゴル史に含められることになった。本来は文化的な差異を示す「胡」を集団の名前として読み替えた背景としては、これにより「中国」とはことなる集団であることを明確化して独立を正当化し、モンゴル史をより古く、より広範囲に記述することが可能となるためであったと思われる。また蔑称を自らの集団名として受け入れることができたのは、漢語史書翻訳の際に、「胡」が意識ではなく、単に「フ」と音訳されたためであろうと指摘した。

第二に、このようなバトオチルのモンゴル史の枠組みは、1934年に刊行され、これまでモンゴル古代史の基礎と位置付けられてきたアマルの『モンゴル略史』にも継承されていたことを明らかにした。これまで、アマルは匈奴を初めてモンゴル史に含めたとされてきたが、実際にはバトオチルの執筆方針を継承したのであった。しかしながら、情報源を漢語史書に頼っていたため、漢語史書において言及されないキプチャク・ハン国やイル・ハン国はモンゴル史からは切り離されることになった。

最後に、このようなモンゴル史の執筆対象に変化が現れるのが1950年代であったことを明らかにした。当時、ソ連内の中央アジア諸国では、それぞれの民族名を冠した共和国史を構築されていた。そこでは、民族は土地に根差して形成されていくという考えから、民族の来歴ではなく共和国の領域上に活動した様々な集団の歴史が扱われていた。この時期に執筆されたモンゴル史も同様に、当時のモンゴル人民共和国領内で活動した集団のみが対象となり、モンゴルの祖先である匈奴の系統とされる(前)趙や夏、鮮卑系の燕や北魏などは除外されていった。また、キプチャク・ハン国、イル・ハン国もモンゴル人民共和国の領土外に興亡した王朝であるために記述されなかった。

以上の研究成果の内容は国際会議や国内のシンポジウムにおいて報告し、その一部は論文として公にした。ソ連史学のモンゴル史学への影響については、ロシア側の史料を十分に調べることができなかつたため、今後の課題として残ったため、引き続き成果が出た段階で公にしていきたい。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

1. Makoto TACHIBANA, “Mongolia’s Encounter with International Law: Mongolian Translation of *Wanguogongfa*,” *Восьмые Востоковедные Чтения БГУ: Сборник научных трудов*, Иркутск, pp.302-309, 2017.11.

2. 橘誠「モンゴル革命—ロシア革命の落とし子か?」『アリーナ』20号, pp.510-513, 2017.11.

3. Makoto TACHIBANA, “From Chronicles to National History: Mongolian Historiography in the early 20th Century,” *XX зууны Монгол: Түүх, соёл, геополитик, гадаад харилцааны тулгамдсан асуудлууд: Түүхч, дипломат Ц. Батбаярын 60 насны ойд зориулсан өгүүлийн эмхэтгэл* (20世紀モンゴル史—歴史、文化、地政学、外交が直面した諸問題：歴史家・外交官 Ts. バトバヤル還暦記念論文集), Улаанбаатар (ウランバートル): Адмон Принт (アドモン出版社), pp.217-226, 2017.12.

4. 橘誠「(書評)岡本隆司著『中国の誕生—東アジアの近代外交と国家形成—』」, 『洛北史学』20, 洛北史学会, pp.158-165, 2018.6.

[学会発表](計5件)

1. Makoto TACHIBANA, “From Chronicles to National History: Mongolian historiography in the early 20th century,” Association for Asian Studies, Toronto (Sheraton Hotel), 2017.3.19.

2. Makoto TACHIBANA, “Offerings, Moneylending, and Taxation: Tibetans and Money in early

20th-century Mongolia,” Association for Asian Studies in Asia, Seoul (Korean University), 2017.6.24.

3 . Makoto TACHIBANA, “Expanding the World of *Wanguogongfa* 萬國公法 : The case of Mongolia in the Early 20th Century,” The effect on Inner and East Asian relations of the advent of modern international law and the end of the Qing empire in the late 19th and early 20th centuries; Perspectives of contemporary sources, Oxford (Oxford University), 2017.9.25.

4 . Makoto TACHIBANA, “W.W. Rockhill’s Visit to Outer Mongolia in 1913: An analysis using William Woodville Rockhill Papers,” Asian Seminar II of the International Association for Mongolian Studies in 2018 “Mongols in the 20th Century”, Tokyo (Showa Women’s University), 2018, 11.3.

5 . 橋誠「モンゴル(人民共和)国におけるナショナル・ヒストリーの形成と変容」, グローバル展開プログラム「グローバル社会におけるデモクラシーと国民史・集合的記憶の機能に関する学際的研究」セミナー「東アジアにおける古代史と国民史」, 関西学院大学, 2019.3.30.

〔図書〕(計2件)

1 . Тачибана Макото, Л.Алтанзаяа эмхтгэсэн (橋誠・L.アルタンザヤ編), *Монгол улсын эртнээс уламжлан ирснийг товчлон тэмдэглэсэн бичиг* (『モンゴル国の古来伝承を略記した書』), Улаанбаатар (ウランバートル): Эрдэнэзул ХХК (エルデネゾル株式会社), 178p., 2016.8.

2 . О.Батсайхан, Тачибана Макото эмхтгэсэн, *Историческая справка: Түүхэн нотолгоо: 歴史的証拠* (O.バトサイハン・橋誠編), Улаанбаатар (ウランバートル): Битпресс ХХК (ビトプレス株式会社), 80p., 2018.4.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者
なし

(2)研究協力者
なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。